

あるという認識は、高齢者の中には強い。さらに、一応複数家族である高齢者世帯は単身世帯予備軍であり、未婚の子と親世帯は、親なき後は単身世帯であり、就労や生活面などにおいて、新たな社会的課題を生み出す予備軍である。これからの高齢期を生きる人たちの動向を踏まえた家族政策も重要であると考え。

#### まとめ（おわりに）

本比較研究は、調査手法、プロセス、母数等に差があるため、客観性、信頼性が薄い面も否めない。とはいえ、課題や社会現象の共通性の一端を把握することができた。今後はデータを精査

し、内容をさらに深めて行きたい。

#### <参考文献>

- ・小国英夫（研究代表者）（2012）『日本・韓国・台湾における社会的介護システムとインフォーマル・ケアに関する比較研究～東北アジア儒教文化圏・感じ文化圏における介護文化の現実』関西福祉大学・地域社会福祉大学研究所
- ・後藤澄江・小松理佐子・野口定久編集（2011）『家族／コミュニティの変貌と福祉社会の開発』中央法規
- ・武永親雄（1973）「日本における老人の自殺とその特質」塚本哲著『老人社会福祉』ミネルヴァ書房 86-87 頁

## 社会教育活動「子どもと自然とのかかわり」に参加する子どもの保護者の育児観の変化および大学生の「子どもが自然とのかかわることへの捉え方」の変化に関する一考察

子ども学科 松永 静子  
 発達臨床学科 佐久間 路子  
 発達臨床学科 金子 尚弘

#### 研究の目的

本研究の目的の一つ目は、自然と関る活動に参加する子どもの保護者からみた、子どもの変化や保護者自身の視点の変化について、二つ目は、子どもの自然体験活動に、ボランティアとして参加する学生の子どもの変化に対する考えや、学生自身の自然に対する捉え方の変化を調査し、それらを分析し、自然体験活動に参加する意義を考察することである。方法はひの社会教育センターの「森のようちえん」および「ポケット」（小学校1年～6年の子どもを対象にした自然体験活動）に参加している子どもの保護者や、ボランティアとして参加している学生を対象にアンケート調査を行った。調査時期が年度末の時期となり、低い回答率であったため、特に2については今後追加調

査を行い結果をまとめていきたいと考えている。

#### 報告

##### 1. 保護者の変化

###### 1) 対象者

幼児や小学生を対象とした自然体験活動に参加している保護者60名に、郵送でアンケートを配布し、16名から回答を得た（回収率27%）。

###### 2) 調査内容

フェイスシートでは、回答者の属性、子どもの年齢、性別、参加回数、活動を知った経緯を尋ねた。続いて、自然体験活動への参加による意識の変化について、①親からみた子どもの変化、②親自身の「子どもを捉える視点」の変化、③親自身の「子どもと自然との関わり」についての考え方

の変化について、変化したかどうか尋ね、変化した場合、その内容を自由に記述してもらった。

### 3) 結果

回答者は全員母親であり、参加している子どもの年齢は4歳から8歳(平均5.8歳)の21名(男児11名、女児10名)であった。参加回数は、1回から15回(平均4.6回)であった。以下では各質問に対する回答内容を整理し報告する。

①親から見た子どもの変化については、変化あり11名(69%)、変化なし5名(31%)であった。変化なしの5名のうち3名は参加回数が1回であった。変化の内容の自由記述(括弧内は記述した人数)は、「知らない子どもや大人と積極的に遊べるようになった(5)」「自然の中でのびのびと遊ぶ楽しさを知った(5)」「興味・関心の幅が広がった(3)」「遊びが変わった(2)」「自然をいやがらなくなった(2)」など、肯定的な変化が記述されていた。

②親自身の「子どもを捉える視点」の変化については、変化あり12名(75%)、変化なし・記入なし4名(25%)であった。内容としては「子どものペースに気づき、口出しをしなくなった(5)」「親が与えるのではなく、子どもが楽しみを作りたことに気づいた(2)」「特別なことをしなくてもよいことに気づいた(1)」「普段とは違うパワーがでることに気づいた(1)」「心配しすぎず、信じて送り出せるようになった(1)」という意見が見られた。自然体験活動への参加は子どものみであるが、子どもの変化に伴い、親の視点も変化していることが明らかになった。特に親と離れて自然の中で遊ぶという活動によって、子育てにおいて口を出しすぎず、適度な距離感を保って、見守ることの大切さに気づくという、親自身の子育て観への影響が見られることが示唆された。

③親自身の「子どもと自然との関わり」についての考え方の変化については、変化あり9名(56%)、変化なし・記入なし7名(44%)であった。変化ありの記述には「自然に触れること、体験することの大切さに気づいた(3)」「身近な環境でも

子どもは楽しめることに気づいた(3)」「自然は子どもを成長させる(1)」というような自然の大切さへの気づきに関する回答が多く見られた。あわせて「自分の子ども時代には当たり前の活動が、今は参加費を払うような特別な活動になってしまった(2)」というような自分の子ども時代との比較をもとに、現代の子どもが自然体験をすることの難しさについての回答も見られた。

### 4) 考察

本研究で対象とした自然体験活動(森のようちえん)の理念は、「本事業に参加する子ども達に「感じる心」「行動する力」が生まれ、「感性」が磨かれるような自然体験活動をおこなうこと、子ども達の力を信じ、自分自身の力で感性や本能、多角的な視点や考えを身に付けられるような活動づくりをめざすと共に、学びと試みを常に実践すること」である(ひの社会教育センター Web ページより)。また運営目標として、「自然に親しむ心を養う」「お互いを尊重しあう心をはぐくむ」「社会性を身につける」「コミュニケーション力を身につける」「保護者も活動を通して自然の必要性を感じる」などがあげられている。本調査の結果から、活動に参加している保護者の半数以上は、子どもの変化と自分自身の意識の変化を自覚しており、またその内容は上記の運営目標と一致していることが示唆された。ただし結果の解釈や一般化においては、本調査の回収率が低く、そのためそもそも事業に肯定的な参加者が回答している可能性があること、また以前から自然活動への興味が高い参加者が多いという点を考慮する必要がある。今後は、参加者回数による比較や親自身の自然とかがわる経験による比較など、さらなる研究が必要である。

## 2. ボランティアの学生の調査報告

### 1) 対象者

「森のようちえん」(小学校低学年の児童および幼児の自然体験活動事業)および「ポケット」(小学校1年～6年までの児童の野外活動、自然体

験活動事業)にボランティアとして参加した学生にアンケートを配布し12名(回収率15%)から回答を得た。

## 2) 調査内容

回答者の属性(年齢・性別・高校生又は大学生であるか)を質問した。内容は①参加の動機、②自身の自然体験の機会について、③自身の幼児期の自然体験で印象に残っていること、④子どもが自然に関わることについて、⑤参加後の自身の変化について質問した。

## 3) 結果

回答者の属性は全員が活動に参加した時期が大学生(全員が保育・教育系)であった。回答者の現在の年齢は19歳~27歳、参加回数は1回~20回、40回、最多で55回であった。以下は各質問にそって報告する。

①参加した動機についての回答は友人からの紹介3名、学童期に「森のようちえん」「ポケット」の参加者が2名、自身の自然体験が3名、子どもとかかわる活動への興味が2名、その他2名であった。これらから自然体験との関連がある回答は4名で33%であった。

②自身の幼児期の自然体験については、自然と関わる体験が多かったという回答が9名(75%)どちらともいえない2名、少なかった1名で幼児期の自然体験の頻度とこのボランティア活動の参加の関連が推察された。

③幼児期の自然体験で印象に残った具体例について、日常の戸外の自然遊びをあげている例が4名(33%)、家族と一緒に体験した例が6名(50%)、幼稚園の行事や自然体験活動をあげている例が2名で、集団での体験よりも日常や家族の中での自然体験が子ども時代の原風景になっていると考えられた。

④ボランティアを通して感じた子どもの変化については記述内容の中に「自然とどう関わってよいかわからず、とまどっている子を見て驚きました。しかし、そんな子が慣れてしまえば飽きることなくひたすら遊んでいた」「親も知らなかった

子どもの可能性を知れる機会にもなる」「子どもの遊び方を見て、自分にも遊ぶ力を求められていると感じた」などがあり、自然と関わって遊ぶ子どもの姿に感動し、変化に気づき、その変化が自分の変化とも関連づけていることが考察された。

⑤活動に参加した自身の変化についての記述では(1)自身の生き方の変化に関するもの「SNSに依存しなくなった、自分が過ごしている今をもっと大切にしたい、楽しく生きていこう」「子どもが自然と関わって遊ぶ姿に触発され、将来の仕事を決められた」「自分らしさを取り戻せた」など5名が記述し、活動により自己肯定感を高め、今までにない新たな自分を発見し将来への見通しを考えている内容であった。(2)子どもの理解に関するもの「子どもはかわいいだけじゃない、未熟な存在でも一生懸命生きている」「子どもにより多くの自然を味わってもらえるよう遊びや自然の知識を増やしたい」の記述が3名あり、子どもの変化から自身の変化と関連づけていた。保育・教育系の大学の学生でもあり、子どもについて学びを深める学外の貴重な場でもあることが示唆された。

## 4) 考察

以上の結果から学生が自然と直接体験したことやおよび子どもの変化を直視したことの両面から自身の変化をとらえていると考察された。親調査で本事業の目的など説明を述べたが、自然体験と子どもの育ちが重要であることは環境、教育、保育の分野からすでに報告されている(岡本、東方)。今回の調査では子ども期以降の青年期の学生の自然体験による自己認識の変化、自然と関わる子どもの変化と対比しながら自身の認識の変化が一部明らかになった。低回収率であるため、この結果をもとに今後さらに追加調査を行い、学生の変化および子どもや学生が関わる自然体験活動の意義等についても考察しまとめていきたい。